

令和七年度 東京都立翔陽高等学校 第十九回卒業式 校長式辞

本日ここに、令和七年度東京都立翔陽高等学校第十九回卒業式を挙げるにあたり、御多用中にもかかわらず、来賓の皆様をはじめ、多数の保護者の皆様の御臨席を賜りましたことを、心よりお礼申し上げます。卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。保護者の皆様にも心よりお祝い申し上げます。本日、皆さんは本校での学びを終え、新しい世界へと旅立ちます。門出を迎える皆さんには、晴れやかさと同時に、少し緊張した表情も見られます。その緊張は、未知へ向かう者だけが持てる、尊い証（あかし）です。

本日ここに並ぶ皆さんの姿を見ていると、一人ひとりの中に確かな成長の光が宿っていることを感じます。その光の源は、本校が掲げるスクール・ミッションにある——「自学・自律・自信」です。そして皆さんはこの三年間、その三つの言葉を「理念」ではなく「実践」として体現してきました。この三つは、本日をもって完成するものではありません。むしろ卒業後の人生で、何度も磨き直し、深めていく「生きる力」そのものです。社会は今、多様化し、変化が速く、先行きが見えにくい時代に入っています。正解が一つではない問いが増え、努力がすぐ結果に結びつかない場面もあります。だからこそ皆さんには、状況に振り回されず、しなやかに立ち上がれる軸を持ってほしい。その軸は、この学校での経験と、皆さん自身の歩みの中に既に育っています。

その象徴が、2年次の台湾修学旅行でした。慣れない土地、異なる言語、違う文化。そこで皆さんは「見学」ではなく「交流」をしました。現地大学生が案内してくれたB&Sでは、ただ連れて行ってもらい案内してもらうのではなく、相手の説明を理解しようと耳を澄ませ、分からないところは身振り手振りも交えながら質問し、互いに笑顔で一日を作り上げていきました。最初は緊張していた人も、次第に表情が変わり、最後には自分から話しかけ、相手の話にながずき、感謝を言葉にできるようになっていました。あの場面にこそ「自学」がありました。教科書の外に出て、自分の感覚で学び取り、自分の言葉で確かめる学びです。

そして台北市にある科学技術大学での国際交流では、更に大きな挑戦がありました。皆さんは、伝えたいことがうまく言えないもどかしさを味わったはずですが、思いがあるのに言葉が追いつかない。文化が違うから、当たり前だと思っていたことが通じない。しかし、皆さんは諦めませんでした。自分の言葉を探し、仲間と支え合い、相手を尊重しながら対話を続けた。その姿こそ、環境に頼らず、自分の判断で行動を選び取る「自律」そのものです。誰かに用意された答えを待つのではなく、自分の選択で一歩を踏み出す力です。

さらに、帰国後の皆さんの顔つきには、確かな変化がありました。交流を終えて戻ってきた皆さんの表情には、確かな手応えが宿っていました。「できた」という小さな成功が積み重なり、静かで強い「確信」となっていました。これこそが、揺るぎない「自信」です。自信とは、誰かに与えられるものではなく、挑戦して、迷って、乗り越えて、自分の内側に蓄積されていくものなのだ、皆さんは身をもって示してくれました。

さて、ここで皆さんに今年正月に行われた箱根駅伝で3年連続9度目の総合優勝を果たした青山学院大学陸上競技部の長距離監督、原晋（はら すずむ）さんの言葉に学ぶ「人生の指針」を二つ、贈ります。テレビでご覧になった人も多いと思いますが、青山学院の強さは一体どこから来るのか？ その秘訣は何か？ 常々その理由を知りたいと思っていた私は、先日読んだ原監督の『「挫折」というチカラ』というタイトルの著書の中で、その理由に出会えた感じがしました。それは、「『できなかったこと』より『できたこと』に焦点を合やす」こと、そして「共感してくれる『同土』と共鳴する」ことの大切さを原監督が示していたことです。

この一つ目の指針は、「できたこと」を見失わないということです。人生には、思い通りにならない日があります。努力したのに届かない。挑戦したのに評価されない。そんなとき人は、できなかったことばかり数えます。しかし、皆さんの歩みは、できたことの連続です。朝、気が重くても登校した。人間関係で悩んでも挨拶を続け

た。練習や勉強で伸び悩んでも、やめずに続けた。台湾で、異文化の中でも相手に話しかけて一歩前に出た。——それはすべて「できたこと」です。落ち込んだときほど、今日できたことを一つ言葉にしてください。小さな「できた」が、次の一歩の燃料になります。

また二つ目の指針は、同志、つまり仲間をつくることです。多様化した社会では、価値観が違う人と協働する場面が増えます。時に誤解され、孤独を感じることもあるでしょう。そんなとき、あなたの思いに耳を傾け、同じ方向を向いてくれる人が一人でもいれば、人は折れにくくなります。台湾で皆さんが学んだのは、言語の壁を越えて相手を理解しようとする姿勢でした。それは、同志を見つける力でもあります。共感とは、待つものではなく、誠実さと行動が呼び寄せるものです。

卒業生の皆さん。これからの社会は不透明で、変化が速い。しかし、だからこそ面白い。答えが決まっていなからこそ、自分で学び、自分で律し、自分を信じる人が、未来を切り拓くことができます。皆さんが台湾で見せたように、勇気は最初から小さくなくていい。小さな一歩でいい。自分の「できた」を数えながら、共に歩む同志を見つけながら、前へ進んでください。

そこで皆さんにお願いがあります。どうか、自分の人生の主語を「私」つまり「自分」にしてください。誰かの期待や世間の評価だけで、あなたの価値を決めないでください。皆さんには、ここ翔陽高校で育てた「自学・自律・自信」という芯があります。つまりいたときは、台湾での自分の姿を思い出してください。知らない場所で、知らない言葉の中で、それでも笑顔で手を差し出した自分を。あの自分は、これからも必ず皆さんを支えます。また、原監督が提唱している「『できたこと』を見失わないこと」、そして「仲間をつくること」、この二つを忘れないで今より一歩前に進んでください。

最後に私の好きな英単語を皆さんにひとつ贈ります。皆さんは、セレンディピティ (serendipity) という言葉をご存じでしょうか？ 日本ではあまり知られていませんし、よい日本語訳もありませんが、「あてにしない偶然の発見」と訳すことができます。これは、十八世紀にイギリスの作家ホレス・ウォルポールが命名した言葉です。例えば自分の部屋でペンを探していると昨日どうしても見つからなかった消しゴムが出て来るとか、行方不明だった大事な手紙が出てくるとかということがセレンディピティです。何か目標を立てて、それを達成することも大切ですが、予期せざる発見にも捨てがたい魅力がある。セレンディピティの発見は、私たちが自由時間に生み出す創造の可能性を教えてくれるように思われます。ぜひ皆さんもこれから出会う「予期せざる発見」を大切にしてください。

結びに当たりまして、あらためて保護者の皆様、お子様の御卒業、誠におめでとうございます。お子様は、人生の中で心身の変化が最も激しいときである高校での三年間を終え、このように身体も心も立派に成長され、今、学び舎を巣立とうとしています。さぞかし感無量のことと、ご拝察申し上げます。これまでいただいた本校への御支援と御協力に対し、この場をお借りしまして厚くお礼申し上げます。最後に、在校生、教職員、保護者の皆様と共に、卒業生の皆さんの「輝く未来」にエールを贈り、式辞といたします。

令和八年三月七日

東京都立翔陽高等学校長 博田 英明